

過疎地域におけるエリアマネジメントに関する研究 ～高校生を核とした主体形成の実践報告～

日本大学大学院生産工学研究科
日本大学生産工学部

学生会員 ○大森 真央
正会員 永村 景子

1. 背景と目的

わが国では、少子高齢化に伴い、過疎地域での市町村の持続的な地域づくりが求められている。持続的な地域づくりを行う上で、重要な観点の1つとして当該地域の人々の暮らしや営みにより形づくられた原風景の保全がある。これまで地域で培ってきたコミュニティの手により、守り継がれることで、今後も地域の人々が思う原風景が当該地固有の環境として保たれる¹⁾。このような原風景は、平成16年より文化財保護法の一部改正により、文化的景観として保護の対象となっている²⁾。

健全なコミュニティの存在がなければ、上記のような地域の生活・文化により根付いた風景の保全が危ぶまれるのみならず、耕作放棄地や放置里山の増加など国土の荒廃をも引き起こす。本研究は、こうした課題に対応する人材として、出身地域(地方)に住民票だけを置いているような若者に着目する。今まで無意識に過ごしてきた地域の原風景への意識付けが重要であると考えられる。本稿では、「若者」を地元から転出しやすく、将来を考える時期である高校生までとし、「大人」を高校卒業した人と定義する。

幼少期から現在まで、風景に限らず地元について何も意識せずに日々を過ごしてきた若者たちは多くいる。このような、若者たちに改めて地域を知ってもらうことで、人材育成の一環として、地域活性化を試みるアクションリサーチを行い、持続的な地域づくりに向けたエリアマネジメントについて考察することが本研究の目的である。

2. 本稿の着眼点

(1) 景観把握モデルに基づく風景保全と人材の位置付け

篠原の景観把握モデルでは、景観現象を分析、計画・設計の立場からモデル化し、人の置かれる場所を視点や視点場として整理している³⁾。本研究ではこれを基に、対象場における人にも着目する(図-1)。

る人材は、篠原の景観把握モデルにもある視点場に存在する人である。②風景の一部として成り立つ人材は、対象場に存在する人であり、当該地域の人々の暮らしや営みにより形づくられた原風景を保全する上で、地域として成り立つために重要な人材である。①・②ともに、風景を意識しながら当該地域で過ごす人材もいれば、②の中でも風景を意識せずとも、当該地域の中で暮らすことで、風景に貢献している人材も存在する。

(2) PDCA サイクルに基づく本研究のプロセス整理

本研究はプロジェクトマネジメントの工程管理に使用されるPDCAサイクルに従ってアクションリサーチを展開し、考察を行う⁴⁾。図-2には、「若者」と「大人」によるプロジェクトの過程をPDCAサイクルに沿って整理した。1年ごとに1サイクルを回し、年々改善しつつサイクルが積みあがっていく。

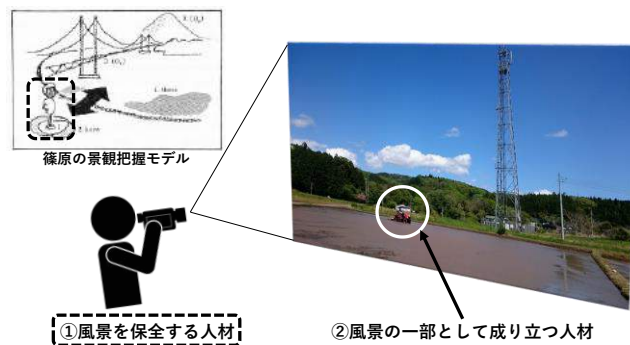


図-1 風景保全に必要な人材(筆者作成)

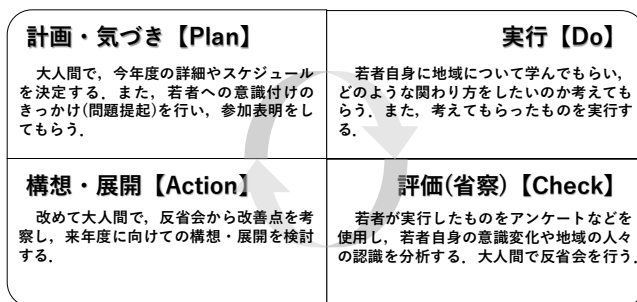


図-2 本研究のPDCAサイクル(筆者作成)

キーワード エリアマネジメント, 高校生, 地域環境保全, アクションリサーチ, 地域活性化

連絡先 〒275-8575 千葉県習志野市泉町1-2-1 日本大学生産工学部 TEL:047-474-2201 E-mail:cima17004@g.nihon-u.ac.jp

3. プロジェクト体制

プロジェクトを行う上で、図-3 のような体制図を作成した。第Ⅰ段階は、現在の体制図である。まず初めに、本プロジェクトを行う中で、重要な A.大口高校と B.活躍の場を提供する主体のつながりを持つことである。2つの主体をつなげ地域間での連携がスムーズに図れるよう、本プロジェクトをコーディネートしていくことが C.大学の役割である。また、高大連携（大学生による大口高校生のサポート）を行うことも C.大学の役割である。

第Ⅱ段階は、次のステップで目標としている体制図である。第Ⅰ段階の地域との連携を図れるようになったので、A.大口高校で持続的に展開していくことを重要視した。A.大口高校は県立高校のため、生徒の入れ替わりと教員の入れ替わりがある。そのため、高校内での段取りの引き継ぎがうまくいかなかったり、他の主体との関係が保てなくなったりする可能性がある。この問題を解消するために、毎年増えていく D.プロジェクト OB・OGの中で、今後も手伝いや後輩にアドバイスをする人材を募り、継続的な参加を促すことで、本プロジェクトの持続性が保たれると考えられる。

第Ⅲ段階は、本プロジェクトの目指す最終形である。C.大学のプロジェクトコーディネートが不在でも地域内で持続的に回っていくような体制（エリアマネジメント）となっている。D.プロジェクト OB・OGが地域に戻り、B.活躍の場を提供する主体として動くことで、A.大口高校と B.活躍の場を提供する主体の連携が途切れることなく続けることができると考えられる。

4. まとめ

プロジェクトを通して、少しずつ高校生の意識が変化していることが明らかとなり、ただ無意識に地域の中で過ごす②風景の一部として成り立つ人材から、自分自身で考え、意識的に①風景を保全する人材や②風景の一部として成り立つ人材としての将来を考えるようになったことが見て取れる（写真-1）。

PDCA サイクルを持続的にを行い、プロジェクト体制を再構築しつつ、工程管理を行うことで徐々にエリアマネジメントを形成することができると考えられる。

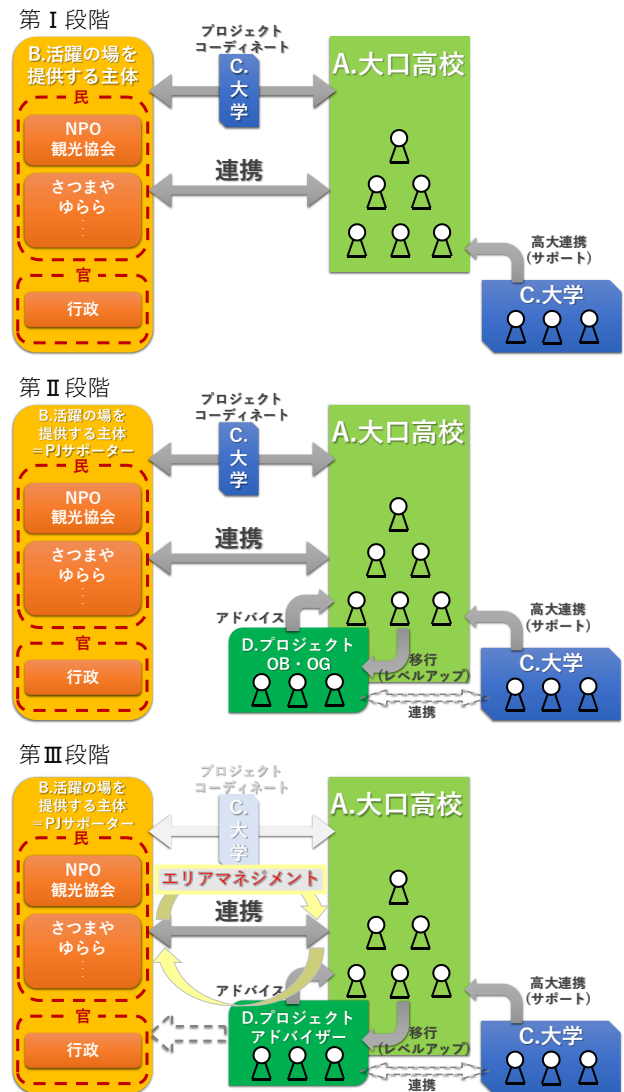


図-3 体制図（筆者作成）



写真-1 高校生との打ち合わせ風景（筆者撮影）

参考文献

- 1) 藤井聡, 秀島栄三, 横松宗太: 土木と景観 風景のためのデザインとマネジメント, pp160-163, 学芸出版社, 2007.
- 2) 文化庁: 魅力ある風景を未来へ-文化的景観の保護制度-
- 3) 景観デザイン研究会: 景観用語辞典, pp30-35, 彰国社, 1998.
- 4) ISO-MS 研究会第4分科会: 図解 これは使えるプロジェクトマネジメント -ISO9000:2000年版対応-, pp19-22, オーム社, 2000.